

- 上野益三『日本博物学史』 平凡社 昭和48年
 磯野直秀『日本博物誌年表』 平凡社 平成14年
 磯野直秀監修『描かれた動物・植物 江戸時代の博物誌』 国立国会図書館 平成17年
 『描かれた自然 江戸の植物図』 鹿児島大学附属図書館編 平成18年
 『高松松平家所蔵 衆鱗図 研究編』 香川県歴史博物館編 平成17年

図版一覧

- 口絵 鹿児島県立図書館所蔵『麿海魚譜』 ホウボウ
 図1 鹿児島県立図書館所蔵『麿海魚譜』 アオブダイ
 図3 磯野直秀監修『描かれた動物・植物 江戸時代の博物誌』 国立国会図書館 平成17年
 図4 芳賀徹監修『平賀源内展』 東京新聞 平成15年 105頁
 図5 早稲田大学図書館ホームページ 古典籍総合データベース 『日東魚譜』
http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ni15/ni15_00712/index.html
 図6 鹿児島県立図書館所蔵『三州物産絵図帳』
 図7 『高松松平家所蔵 衆鱗図 第一帖』 香川県歴史博物館編 平成13年 11頁 マダイ
 図8 長崎歴史文化博物館ホームページ 川原慶賀作品データベース マダイ
<http://www.nmhc.jp/keiga01/kawaharasite/top2/top2.html>
 図9 京都大学電子図書館 貴重資料画像 『日本動物誌』 魚類編 アカグツ
<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/b02/pisces.html>
 図10 鹿児島県立図書館所蔵『麿海魚譜』 アカグツ
 図11 『グラバー魚譜200選』 長崎大学水産学部監修 長崎文献社 平成17年 123頁 イトヨリダイ
 図12 『大野麥風と大日本魚類画集』 姫路市立美術館編 平成22年 33頁
 図13 狩野博幸監修『伊藤若冲大全』 京都国立博物館 平成14年 140頁

魚類学的視点からみた『麿海魚譜』

本村 浩之

明治16年に完成した『麿海魚譜』は、今から130年前の鹿児島の魚類相を知るうえでたいへん貴重な史料であるといえます。描かれている魚の絵の多くは写実的であり、種の特徴がよく表現されています。標本に基づく鹿児島の魚類に関する研究は明治34年まで待たなければならず（本村、2012b）、それ以前の鹿児島の魚の記録として、『三州物産絵図帳（享保19年発行）』と『麿海魚譜』の重要性は計り知れません。

明治44年に刊本『麿海魚譜』の復刻本が出版されました。この復刻本には魚類学者の田中茂穂氏による再同定結果が付記されました。また、肉筆彩色本『麿海魚譜』（図書館本）の復刻版『新編 麿海魚譜』は昭和54年に出版され、本書では当時日本魚類学会会長であった阿部宗明氏をはじめとする専門家による再同定の結果が記されています。

阿部氏は『新編 麿海魚譜』の中で、「(刊本『麿海魚譜』の復刻本で再同定をした) 田中先生の時代に、当時の日本の魚学のレベルでは明らかに出来なかったものが、半世紀以上経った現在判然とした例も幾つかある」と記述し、さらに「後世更に多くの種が正しく査定されるかもしれない」と予想しています。実際に『新編 麿海魚譜』で阿部氏が同定できなかった魚の多くを同定することができそうです。例えば、『新編 麿海魚譜』で「キントキダイ属の一種 *Priacanthus* sp. (p.17)」とされているものは「ミナミキントキ *Priacanthus sagittarius* Starnes」、 「シマアジ属の一種? *Longirostrum* sp. ? (p.87)」は「シマアジ *Pseudocaranx dentex* (Bloch and Schneider)」、 「ヒメオコゼ属の一種 *Minous* sp. (p. 101)」は「カゴシマオコゼ *Paraploactis kagoshimensis* (Ishikawa)」と正しく同定することができました。

さらに、『新編 麿海魚譜』では誤同定されている種も多くあります。例えば、「クルマダイ *Pristigenys nipponia* Cuvier (p.19)」は「チカメキントキ *Cookeolus japonicus* (Cuvier)」、 「ムラソイ *Sebastes pachycephalus*

pachycephalus Temminck and Schlegel (p.37)は「サツマカサゴ *Scorpaenopsis neglecta* Heckel」、*ニラミカサゴ* *Scorpaena albobrunnea* Günther (p.38)は「ヒレナガカサゴ *Neosebastes entaxis* Jordan and Starks」と再同定されます。『新編 麿海魚譜』が出版されてから30年以上が経った今、現在の魚類学の知識に基づいた再同定の結果を出版すべき時期なのかもしれません。

命名上の問題は、研究が進めば進むほど解決されていく(変化する)ものであるため、『新編 麿海魚譜』の価値が誤同定によって低下することはありません。むしろ、当時の魚類学の知見や考え方、状況などが読み取れるため、ひじょうに貴重な記録であるといえます。例えば、『新編 麿海魚譜』の24頁に「ヤギス」が掲載されており、阿部氏は「東京湾から九州へ分布するが、近年激減している」と記しています。本種は標準和名アオギスと呼ばれる魚で、現在、九州以外の海域では絶滅しており、鹿児島県でも吹上浜にわずかな個体数のみが生息することが知られています(ただし、ここ数年は確認された記録がありません)。『新編 麿海魚譜』の記述によって、少なくともアオギスが当時はまだ東京湾から九州にかけて広く生息していたことが分かりますし(実際は絶滅した直後と思われる)、『麿海魚譜』の絵によって明治前半にも本種が鹿児島に生息していたことが証明されたわけです。

『麿海魚譜』に描かれた魚の多くは市場から入手されたものであるといわれており、その中には鹿児島湾から採集された魚も多く含まれていたことでしょう。大正3年1月12日の桜島大正大噴火によって、桜島が大隅半島とつながり、鹿児島湾の海流が大きく変わったと推測されています。この影響で湾内の魚類相が変化した可能性が示唆されており(本村、2012a)、桜島大正大噴火以前の鹿児島湾の魚類相を知る上での『麿海魚譜』の学術的価値はひじょうに高いといえます。しかし、出版された各版の『麿海魚譜』には、描かれた魚の由来(採集場所や入手経緯)が記されていません。採集場所が分からなければ鹿児島湾の過去の魚類相を知ることもできません。幸いなことに、『麿海魚譜』に掲載された絵の原画には絵師によるメモが残っている場合があります。今後は各絵の記録を調べ、モデルとなった個体の採集場所を明らかにした上で鹿児島の各海域の当時の魚類相を把握することが重要であると考えられます。

『麿海魚譜』にはその美術的価値に匹敵するほどの魚類学的価値があります。今後は、再同定や採集場所の精査を経て、より高い精度で130年前の鹿児島における魚類相を明らかにしていくことが望まれます。

引用文献

- 本村浩之. 2012a. 黒潮が育む鹿児島県の魚類多様性. p.19-45. 松浦啓一(編)黒潮の魚たち. 東海大学出版会, 東京.
 本村浩之. 2012b. 錦江湾奥の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館ニューズレター, 30:15-17.

2012年度イベント報告

- 第17回研究交流会 7/7 「災害と文化遺産—歴史資料レスキューの取り組み—」 松下正和(近大姫路大学教育学部・歴史資料ネットワーク副代表)
 第12回自然体験ツアー 7/21 「船で行く錦江湾奥と新島探検」 大木公彦(鹿児島大学名誉教授)、鹿野和彦(鹿児島大学総合研究博物館)
 第12回公開講座 10/20 「封入標本づくり」 三橋弘宗(兵庫県立大学自然・環境科学研究所)
 第12回特別展 11/1-11/30 「錦江湾奥の自然と人とのかかわり」
 第22回市民講座 11/10 「錦江湾奥のナゾにせまる」 山中寿郎(岡山大学大学院自然科学研究科)・富安卓滋(鹿児島大学理学部)
 第9回学内コンサート 11/12 「秋の調べ」 石井いずみ(ヴァイオリン)・海老原麻衣(ピアノ)
 第23回研究交流会 12/15 「モノとしてのパゴダー・マンマーの巡礼・遺跡・観光—」 土佐桂子(東京外国語大学)